

事業所数であり、企業秘密とそれほど関係がないと思われる従業者数までかくされている。これはいささか行きすぎであるように思う。それはさておきとして、実在するデータが人為的にかくされていると事実を認めた上で、改善の策として試みられる方法が、かくされているデータを何らかの方法で推定することである。小生がここ2、3年とりくんできたことといえば、未知のデータを推定することであった。不十分なから一定の精度で推定値が得られるようになり、一息ついているのが現状である。

地域統計がもつさまざまな弱点を克服する努力がこれまで全然なかったわけではない。推定方法の開発もその一つであり、総理府統計局が中心となってはじめられたメッシュ・データの作成もそうした努力のあらわれである。これは「小は大をかねる」ことに着目して、約1 km<sup>2</sup>の地域メッシュに各種の官庁統計を収録したものである。次の課題はかくされているデータをいかにして利用可能な状態にするかということであろう。これを実現するためには、地域統計の設計と編集の各段階で地域分析に必要な項目が立てられるように、地域統計利用者は発言力を高めていくことが必要である。

## 武蔵野の山菜

斎藤 功

武蔵野の雑木林は「木はおもに檜のたぐいで冬はことごとく落葉し、春はしたたるばかりの新緑萌えいずるその変化が秩父嶺以东十数里の野いっせいに行なわれて、春夏秋冬を通じ霞に雨に月に風に霧に時雨に雪に、緑陰に紅葉に、さまざまの光景を呈する妙」（国木田独歩 武蔵野）といわれるように人の心を和ませるものがある。埼玉県境にあるわが東久留米の宿舍周辺には未だ雑木林が多く残っている。とくに生命の息吹を感じさせる萌黄色の新緑、生ビールのあう緑陰、深山ほどの色彩はないが紅葉、落葉を踏みしめて歩く枯野と陽光等は武蔵野の散策の醍醐味を感じさせる。また、子供との散歩の折々に山菜を採取して帰るのも楽しみの1つである。

昨年、雑木林の芽吹き頃、タラの芽が武蔵野でも採れることを発見した。タラの芽は山菜の王といわれるだけあって、天麩羅にせよ、おひたし、あえものにせよ飲物のつまとして最高であり、春を満喫させる添物である。また、ワラビ、ノビル等もこの季節のものである。ワラビは人の手の加わった後を追いかける雑草であるため、耕地と雑木林の境や武蔵野の原景観といわれる草地状のところのみうけられる。高原や北辺の地のワラビと異り、硬く苦味も強いように感じられるが、その日の収穫物と思うと味わいもひとしおである。ノビルは生でも食べられるが味噌炒めがある。このほか、タンポポやフキノトウなども見うけられるが、あくぬきの研究が不十分なため、食卓にほとんどほることがない。

雑木林のなかのエゴの木が白い清楚な花を一面に咲かせる梅雨時から盛夏にかけての時期は山菜にとって夏かれ時であろう。カラスノエンドウなどのレリクト・クロープもみられるが未だ試食していない。秋には山グリや野イチゴなどのナットとベリー類も散見されるが、晩秋の山の芋（ジネンジョ）が筆頭にあげられよう。根裁農耕文化圏から最も初期にわが国に伝来したといわれるジネンジョは市

販されているヤマトイモよりも粘着力が数倍強く野生味を感じさせる食物である。ムギトロにせよ、ヤマカケにせよなかなかの味である。秋の味覚の代表はキノコといわれているが、研究不足のため試食するにいたっていない。今後家計の補助のためにも少しづつ勉強し、酒の肴の領域を拡げていきたいと考えている次第である。

## 30年目のクラス会

貝山久子

1月15日は小正月である。又の名を女正月ともいう。この日に泊りかけでクラス会を催すならわしが出来て今年で4年目になる。第1回は京都、第2回は奈良、第3回は神戸、そして今年は鎌倉でこの会合をもった。松籟を耳近くに聞くこの旅荘には12人が集まった。広島から1人、関西から2人、新潟から1人、あとは首都圏に住む8人、卒業以来はじめて、という人も中にあって、一別以来の話に花が咲いた。しかしこの夜の話題の中心は去年の会合で提案された卒業30年記念文集の出版についてで、すでに集まった30篇の原稿はタイプ印刷の小冊子になって、他のプリント類と共に皆に配られた。私も30年の間にかなり変化のあった母校キャンパスの地図を作って持参した。

人間の記憶には曖昧な点が多く含まれ、年がたつにつれてそれが曖昧なまま固定した観念になる。皆で小冊子をよみ乍ら誤りや疑問点を訂し、編集委員をきめ、もっと多くの原稿を集めて自費出版の形でもよいから印刷にしようという結論に到達したのは午前2時であった。

翌日はお昼に精進料理を食べさせて下さる山の内の長寿寺まで歩くことになり、途中八幡宮に参詣したが、丁度成人の日とあっておびただしい参拝者の中に美しいふり袖姿が目立った。夢と希望にみちあふれた20才の青春。しかし私達の20才の日々はどのように明け暮れていたのだろうか。

クラスメートの小原喜代子さんの手紙(御両親あて)の抜粋。

19年10月26日

昨日まで猛烈な忙しさで夜勤と日勤をぶっ通し即ち24時間通しの労働も何回か致しました。ヤスリの切傷やハンドルを握るために出来た豆で手がすっかり工員さんらしくなりました。指先が荒れて方解石のようにボロボロくずれている上に油がしみついてとれないので、何とも情けない手になりました。

今も私の傍でガーガーと機械が廻っております。私の仕事はプレスで鉄板に穴をあけたり、色々の形にうちぬいたり、圧しつけて形をつくったりします。ペタルをふむとガチャンと上から落ちて来て圧搾するのです。ねぼけて足をペタルにふれたりすると外傷しますからたえず緊張していなければいけません。

19年12月

今年は大晦日が夜勤明けで元旦から日勤です。この間空襲や工場の作業中死んだ時に貰える保険に入りました。3円ずつ納めて1,000円貰えるそうです。毎月3円ずつ納めるのかしら? 一度3円を納めておけばいつ死んでも1,000円貰えるのよ、と云っている人もあります。受取人はお父さまの